

「絆」をめぐる現代と中世

— 東日本大震災にふれて —

山本博也

昨年、すなわち 2011 年の「今年の漢字」は「絆」だった。毎年 12 月に、京都の清水寺で、お坊さんが大きな筆をふるって、大きな紙に、漢字一字を書くというパフォーマンスが行われる。これは財団法人・日本漢字能力検定協会が主催するイベントで、その年の世相を示す漢字一字を公募し、最も応募数の多かった漢字を「今年の漢字」に認定し、その漢字を清水寺の貫主に揮毫してもらって発表するというものである。

昨年の応募者数は、一昨年の 28 万 5406 票を大きく上回り、過去最多の 49 万 6997 票だった。そのうち「絆」が 6 万 1453 票を集め 1 位、2 位は「災」で 2 万 8648 票、以下 3 位は「震」、4 位「波」、5 位「助」だったという。(12 月 13 日付毎日新聞)

昨年の漢字として「絆」に多くの票が集まったのは、「東日本大震災やタイの洪水など国内外で大きな自然災害が相次ぎ、人のつながりの大切さを改めて感じたことや、サッカー女子ワールドカップで初優勝した『なでしこジャパン』のチームワークが主な理由」と解説されていた。(同上新聞記事)

昨年 3 月に起きた東日本大震災は、東北地方の人たちに甚大な被害をもたらしたが、震災に遭われた人たちが立ち上がるために最も大きな力となったものは、人と人との絆だった。以前からあった、人と人とのつながり、信頼。そして震災を機に結ばれた新しい出会い、思いやり。瓦礫の撤去のために集まった多くのボランティアの人たち。全国から寄せられた励ましの言葉、多額の義捐金と大量の物資。備蓄していた物資のすべてを被災地に送った自治体もあったという。

そうして、家族も、家も、思い出の品もすべてを失ったといいながらも、元気に立ち上がり、笑顔を見せる被災地の人たちの姿を見ると、人間にとって一番大事なものは何なのか、尊ぶべきものは何なのか、あらためて考えさせ

られる。

「仙台デパート大盛況」「歳末商戦 震災前より売り上げ増」「家族の絆が後押し」という見出しで、クリスマスケーキやお節料理セット、お歳暮の売り上げが伸びているという新聞記事もあった(12 月 6 日付毎日新聞夕刊)。そこには、「家族と一緒に過ごし、絆を確かめ合おうという人が増えているためではないか」「被災した相手先を気遣い、今年のはしをかけずに贈る人も目立ちます」という店の担当者の話が載せられていた。

また震災後、エンゲージリングが売れているというテレビ報道もあった。「震災婚」という言葉も生まれているという。「強い絆で結ばれる家族を持ちたいという若者が増えたためでしょう」とコメントされていた。

今年に入って、1 月 25 日にスイスのダボスで開幕した世界経済フォーラム(ダボス会議)で、招待されてスピーチした俳優の渡辺謙さんが、東日本大震災にふれて「行き場を失った人々に残ったのは、人が人を救い、支え、寄り添う『絆』という文化だった」と語りかけたという。(1 月 26 日付毎日新聞)

地震、大風、大水、旱魃、飢饉、疫病、戦乱のうち続く中世の日本。その時代、人々の生きる支えとなっていたものは、まさに絆だった。日本中世史の泰斗であった恩師の石井進先生は、絶筆となった著書で、中世社会の特色の一つとして、「さまざまのかたちで人と人を結びつける、人間の鎖のような関係が発達した」ことを挙げておられる。(石井進『中世のかたち』中央公論新社)

いくつか例を見てみよう。

鎌倉時代の中ごろのことである、鎌倉の若宮大路の脇の店で小山氏一族が宴会をしていた。その中の一人の武士が犬を目がけて射た矢が、大路の反対側の店に飛び込んだ。そこでは三浦氏一族が宴会をしており、両者の間で喧嘩に

なった。するとたちまちのうちに、「両方の縁者馳せ集まり群れを成す」ということになって大乱闘になってしまった。(『吾妻鏡』仁治2年11月29日条)

応永26年(1419年)というから、室町時代の中期、京都での出来事である。掃部助という人物が、注文した本結がなかなか出来てこないで、下女を本結屋にやって文句を言わせた。下女は本結屋にさんざん「悪口」を吐いた。怒った本結屋はその下女を殴りつけるなどしたうえ、下女の髪を切り落としてしまった(それは当時の女性にとって耐え難い屈辱だった)。下女は走り帰って主人の掃部助に訴えた。掃部助は、自分が公家の三条家の青侍だったので、支援を求めるために主家の三条家に行こうとした。それを予測した本結屋は、彼は幕府近習の関口氏の若党だったので、関口氏配下の同輩たちに応援をたのみ、掃部助を待ち伏せして決闘となり、二人とも落命した。そこへ事件を知った三条家の同僚たちが駆けつけ、さらに関口氏配下の被官たちも押しかけて合戦となった。関口氏側はさらに三条家に襲撃をかけようとした。さすがに見かねた吉良氏が三条家の警護についたため、関口氏側は襲撃をあきらめた。吉良氏は関口氏の本家筋である今川氏のさらに本家筋に当たる名門である。ここに至って騒ぎはようやく沈静化した。(『看聞日記』応永26年6月23日条、清水克行『喧嘩両成敗の誕生』講談社 参照)

戦国大名後北条氏は、天正6年(1578年)に、世田谷に六斎市を立ててそこを楽市とした(これが今日の世田谷ボロ市の起源とされる)。そのことを定めた北条家掟書(大場文書、世田谷区立郷土資料館に原本が展示されている)には、次の5項目が規定されている。

- 一、市の日一か月
 - 一日 六日 十一日
 - 十六日 二十一日 二十六日
- 一、押買狼藉堅く停止せしむること
- 一、国質・郷質取るべからざるのこと
- 一、喧嘩・口論停止せしむること
- 一、諸役、一切あるべからざるのこと

後北条氏がこの市場での商取引が円滑に行われるように、治安維持を保障しているが、第3項にみられる「国質・郷

質」というのは、債権者が債務者本人でなくて、債務者と同じ地域の住人から、債権を取り立てることをいう。この当時、そういうことが社会的慣行として認められていたのである。同じ地域に住む人々相互の絆の強さがうかがわれる。だから市場に出かけていくと、身に覚えのない債務取り立てに遭うおそれがあった。そこで後北条氏は、「国質・郷質取るべからず」と、市場でのそのような行為を禁止することによって、人々が安心して市場に来ることができるようにして、商取引を活発にさせようとしたのである。

以上のように、中世においては、血縁はもちろんのこと、主従の縁や同輩の縁、地域の縁などの絆が強く存在していたことを知ることができる。とりわけ強い絆で結ばれていたのは、国人一揆や土一揆などの一揆を結んだ人々であった。

たとえば、南北朝時代に、九州・五島列島に住む領主31人が結んだ一揆契状がある(日本思想大系『中世政治社会思想 上』岩波書店所収、「宇久・有河・青方・多尾一族等契約状」)。ここでは、いくさになったら、「一味同心の思いを成し」、銘々勝手な行動をとらないで、結束して戦うことを約し、また、公私によらず、メンバーの誰かにとっての問題は、メンバー全員の問題ととらえることをうたっている。しかも「一味同心の思いを成し」は、文飾ではなく、神前において、誓約を認めた文書を焼き、その灰を神水に浮かべ、それを一同で回し飲みをするというのが、一揆を結ぶ作法だったのである。そのような強い結束をもったメンバーであるので、約束を破ったならば、永久追放という制裁を与えることも誓約している。

中世には、朝廷や幕府が存在したが、それは人々の生命の安全や生活の安定を保障してくれるものではなかった。したがって人々は自分で自分を守らなければならなかった。かといって一人の力では弱い。そのために人と結びつき、絆を結び、その絆によって自分の生活といのちを守ったのである。

東日本の震災直後は、行政機能が寸断され、国の支援も届かない状況だった。まさに中世社会のような状況が一時的に現出したのである。そこで人々の生活を支えたのは、中世社会がそうであったように、人々の絆だったのである。

もっとも、中世においても、人々の生活と安全を守る制度や装置が全くなかったわけではない。鎌倉幕府において

も、室町幕府においても、裁判は存在した。

しかしその裁判に関して、次のような法令が出されている。

一、口入の事

右、或いは権門の威に募り、或いは縁者の由を称し、口入を企つるの間、奉行人怖畏の思いを成すか。世の為人の為、その科軽からず。違犯の輩有らば、同じく召し仕うべからず。

(鎌倉幕府追加法 608 条)

また室町幕府が守護の非法として禁じた事柄の中に次の一項がある。

一、縁者の契約を成し、無理の方人を致す事

(室町幕府追加法 35 条)

これらによれば、権門や守護が、訴訟当事者の「縁者」と称したり、訴訟当事者と「縁者の契約」を成したりして、裁判に介入していたことがわかる。無論、法令はそれらを禁ずるものである。しかし禁令が出るということはその対象となる行為が存在したということに他ならない。

そのような事態は、鎌倉幕府の早い段階から存在していた。御成敗式目の第 30 条には次のようにある。

一、問註を遂ぐるの輩、御成敗を相待たず、権門の状を執り進む事

右裁許に預かるの者は強縁の力を悦び、破棄さるるの者は、権門の威を愁う。ここに得理の方人は頻りに扶持の芳恩と称し、無理の方人はひそかに憲法の裁断を猜む。政道をけがすこと、もととしてここに由る。自今以後たしかに停止すべきなり。或いは奉行人に付け、或いは庭中において申さしむべきなり。

すなわち、裁判の判決が出る前に、訴訟当事者が、権門から書面を出してもらって裁判を有利に進めようとするのがあり、今後はそれを禁ずるとというのが、第 30 条の趣旨である。だからこそ式目制定に当たって、幕府執権北条泰時は、権門を恐れず、えこひいきせず、道理に基づいて

裁判を行うことを神に誓う起請文を、裁判担当者たちとともに作成している。しかし上に見た、鎌倉・室町幕府の追加法を見れば、中世を通じて、縁者と称する人と人との絆がいかに強かったかがうかがえる。実は当の泰時も、弟の朝時の屋敷に賊が入ったと聞くと、幕府の評定の席を蹴って救援に駆け付けている。それを家司の平盛綱が、執権の重職を帯びる身として軽率だと諫めたのに対して、泰時は、「兄弟が殺されるのを見過ぎたなら世間の誹りを招くだろう。そうなれば重職もなにもあったものではない」と応じたという。(『吾妻鏡』寛喜 3 年 9 月 27 日条)

人は失うことによって、失ったものの大切さに気づくことが多い。病気になって健康の有り難さに気づき、友を失って友情の大切さに気づくように。震災によって、肉親や友人・知人との絆を永遠に失ったことによって、人と人との絆の大切さにあらためて気づかされたのである。

私たちは、「暗黒の？」(言い古された言い方で、近年は聞かなくなった気がするが) 中世を脱して、窮屈だった封建性を脱ぎ捨て、明るく自由な近代社会をつくりあげ、さらには今超快適な現代社会を謳歌している。無論私たちの得たものは大きい、その過程でしかし、失ったものも多かったのではないだろうか。「絆」もその失ったものの一つだっただろう。

ただしかし、中世社会に存在した絆を、そのまま現代社会に蘇らせればいいというものではない。中世と現代とでは社会の枠組みが全く異なるし、中世における絆も、問題をはらむものでもあった。先に見たように、それはエゴにほかならないこともあり、裁判の公正さをそこなうものでもあり、また絶えざる紛争の種となるものでもあった。

中世における絆は、特定の集団・組織のメンバーとしての絆であった。それは集団・組織のメンバーなるがゆえの、いわば受動的な絆であり、閉じられた絆であった。集団や組織は、しばしば独善に陥り、外に対しては排他的、内に対しては抑圧的となる。現代において私たちの求める絆は、そのような弊害をもたない、自律的な、開かれた絆でなければならない。

失うことによって、失ったものの大切さに気づくことのほかに、今失ったものがかつて得たことによってその時に失った大切なもの、に気づくこともある。被災地で、電気

が来なくなって、星空の美しさにあらためて気づいたと言っていた人がいた。つまり、私たちは電気を得、夜の明るさを得たことによって、星空の美しさを失っていたのである。考えてみれば当たり前のことだが、何かを得ることは何かを失うことである。一杯のコーヒーを得たことは何百円かを失ったことであり、映画を見て楽しんだとすれば、何千円かと何時間かを失っているのである。

何かを得ることは何かを失うことだと言った。それは逆にいえば、何かを失ったとすれば、そこには得られる何かがあるということでもある。人がそういう摂理の中にあることは、私たちにとっての救いではないだろうか。

年末に届けられた喪中葉書の中に、卒業生からのものがあった。「長女が12歳で永眠いたしました」とあった。そして一茶の句「露の世は 露の世ながら さりながら」が添えられてあった。返すことばもない。しばらくして、「さりながら さりながらなお さりながら。 あたたかくなったら、大学にも遊びに来てください。」と返信するばかりだった。

東日本大震災一すなわち巨大地震と大津波という、「忘れられたところにやってきた」自然の猛威と、原子力発電所の損壊による放射能汚染という科学技術の思わぬ落とし穴と一を目の当たりにした（それはテレビの画面に繰り返し映し出された）私たちは、人間とは何か、社会とは何か、自然とは何か、科学技術とは何かについて、根本的な見直しをせまられたといえるだろう。

一瞬にして多くの命が奪われる。親が子が、ついさっきまで話し、笑っていた友人・知人が、一瞬にしていなくなる。なぜ？ どうして？ 彼らの人生は何だったのか。生き残った、あるいは残された私はなぜ？ どうして？ 何をすればいいのか。

災害の現地から遠く離れて暮らす人たちにも、同じ問いが存在するはずだろう。それは明日はわが身かも知れないという単純なことではなくて、同じ日本人であり、同時代に生きる者同士であり、一つの地球に生きる人類であるという、被災地の人たちとのまさに絆が存在するからである。それは開かれた絆である。

大きな被害を受けた、東北地方太平洋沿岸は、日本有数の水産地帯、まさに自然の恵みに恵まれたところだった。

それが一転、地震と津波という天災に見舞われたのだった。

自然とは私たちにとって何なのか。自然にとって私たちは何なのか。

人間が生まれるはるか前から自然はあった。その自然の中に人間が誕生した。それは自然の歴史の中ではつい最近のことだろう。津波によって根こそぎ家々が持っていかれて更地のようになった土地。そこはその昔は、砂原か草地だっただろう。もともと自然の一部にすぎなかった人間。いや、今でもそうだろう。原子力を造り出し、宇宙船を飛ばし、臓器移植をするようになった今日でも、この本質は変わっていないのではないだろうか。「人類は、少なくともおよそこの5万年にわたって、その基本的な脳の働き方において少しも変わっていないのである。……私たちは、ラップトップをかかえた石器人でもある」という、行動生態学者長谷川眞理子氏の指摘（2003年4月27日付朝日新聞）は示唆的である。

人と人とが絆を結ぶ以前に、人は自然と強い絆で結ばれていたというべきではないだろうか。近代化の過程で、私たちが失ったものの最大のものは、まさにそれなのではないだろうか。いや、人と自然とが強い絆で結ばれているという事実自体はなくなっていない。現代人が失ったものは、人と自然とが強い絆で結ばれているという事実についての自覚であろう。

「何事のおはしますをば知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」（西行法師家集）とよんだ中世人はたしかに、自己と自然との、いや自然のさらに向こうにある大いなるものとの絆を感じ取っていたにちがいない。

（やまもと ひろや 歴史文化学科）